

エッセイ集

『出雲国風土記』と松江の歴史 エッセイ3

『出雲国風土記』にみる  
古代人の  
レジャーと観光 〈松江市編〉

森田喜久男



松江市

【表紙写真】 大海崎町の中海湖岸から望む大山

1

本エッセイは、松江市が2026年3月に公開した、「『出雲国風土記』と松江の歴史」を構成するエッセイ集の第3編です。

---

2

著者は淑徳大学教授 森田喜久男さんです。

---

3

本文は、森田喜久男さんの書き下ろしです。

---

4

写真は、松江市の職員が撮影したものです。

---

5

写真の引用はかまいませんが、引用先（『出雲国風土記』と松江の歴史）を明記してください。

---

6

「『出雲国風土記』と松江の歴史」は次頁の9編を公開しています。本編と一緒に、是非ご覧ください。

〈 公開中 〉

## A 本文編 (全5章)

---

<http://UR/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL>

## B 詳細解説編

---

### 1 『出雲国風土記』と松江の山と野 詳説

<http://UR/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL>

## C エッセイ集

---

### 1 『出雲国風土記』の郷の伝承 〈松江市編〉 [森田 喜久男]

<http://UR/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL>

### 2 『出雲国風土記』の山 登頂記 —「風土記の山」の風景と魅力— [三代 隆司]

<http://UR/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL>

### 3 『出雲国風土記』にみる古代人のレジャーと観光 〈松江市編〉 [森田 喜久男]

<http://UR/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL>

本編

## D コラム集

---

### 1 地質学からみた『くにびき神話』 [野村 律夫]

<http://UR/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL>

### 2 『出雲国風土記』の布自枳美高山・女嵩山と嵩山・和久羅山

<http://UR/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL>

### 3 『出雲国風土記』に登場する豪族 出雲臣と社部臣

<http://UR/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL>

## E 読下し編

---

(松江市部分 巻首・意宇部・島根郡・秋鹿部・巻末の一部)

<http://UR/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL>

# 『出雲国風土記』にみる 古代人のレジャーと観光

## はじめに

---

現代に生きる我々にとって、周囲は五感を刺激するさまざまなモノにあふれています。お金さえあれば、旅に出て非日常的な世界を体験し、気分転換を行うことも可能です。レジャーは、時には贅沢とか放蕩という言葉で語られることがありますが、それは人々が生きていく上で必要不可欠な営みなのです。

# 目次

<b>1.</b>	古代出雲人のうたげ	
	(1) 神の湯 .....	001
	(2) 水辺のうたげ .....	002
<b>2.</b>	歌垣 .....	004
<b>3.</b>	広い範囲から人が集まるうたげの場 .....	005
<b>4.</b>	風土記の景観 .....	006

1

## 古代出雲人のうたげ

では、古代出雲人はどのようにしてリフレッシュし、明日への活力を得ていたのか。古代出雲の行楽地は、現在の松江市玉湯町や大海崎町にありました。

### (1)神の湯

玉湯町と言えば、玉造温泉が全国的に有名ですが、この温泉、実は古代から「神の湯」として知られていたのです。その効果を『出雲国風土記』意宇郡忌部神戸条は、以下のように解説します。「ひとたび、その湯を体にかけて美人になり、重ねて湯につかれれば、どんな病もなおる」。『出雲国風土記』同郡同条には、「川のほとりに湯が出ている」「出で湯のある場所は海と陸の境目にある」と書かれています。この場合の海とは、宍道湖をさします。古代においては、宍道湖と中



玉湯川兩岸の玉造温泉街

海とをあわせて「入海」と呼ばれていました。その「入海」へと注ぐ玉作川の河口部分に温泉があったのでしょうか。そこに老若男女が集まって、酒宴を楽しんだようです。古代人を癒やした温泉が、1,300年の時を経て今も続いている。これは素晴らしいことだと思いませんか。

## (2)水辺のうたげ

**目無水** 続いて大海崎町ですが、そこには目無水という場所があります。それは『出雲国風土記』島根郡邑美冷水条に「邑美冷水」として登場します。『出雲国風土記』によると、「東西北には険しい山がそびえているが、南に海が広がっている。真ん中には池があって、清水が湧き出ている。老いも若きも男も女も、そこへ集い宴をしている」と書かれています。さて、ここまで読んできて、不思議だと思いませんか。東西北は、山に囲まれた「邑美冷水」ですが、人々はそこへどのようにして出かけたのでしょうか。ヒントは南に海があるということ。そうです。

古代出雲の人々は、「邑美冷水」までは船で行ったのです。おいしい食べ物や酒を持ち寄って船に乗る。きっと気分が高揚したに違いありません。



大海崎町 目梨水

**前原埜** さて、実は松江市域にはもう一つ行楽地がありました。『出雲国風土記』島根郡前原埜条に記された「前原埜」です。場所については、大海崎町と見



大海崎町 西側から湖岸を望む

る説と美保関町下宇部尾と見る説があります。「前原」の読みについては「さきはら」と読むべきか「まえはら」と読むべきか、悩ましいところです。もしも「まえはら」と読むことができれば、美保関町下宇部尾の万原地区の可能性が出てきます。

この「前原埜」については、先に掲げた二つの場所と

異なり、老若男女と言うより、カップル限定でした。『出雲国風土記』によると、「男女が折々に集って、楽しんで帰るが、時には楽しみ過ぎて帰ることを忘れて宴を行う場所だ」と書かれています。この場所も「邑美冷水（おおみのしみず）」と同様に東西北を山に囲まれていて、麓には池があり、そのほとりに草木が生えていました。そこにはオシドリやタカベ・カモなどが飛来したようです。宴では、それらの鳥を捕って食べることもしていたかもしれません。池の南には海が広がっていました。池と海との間は砂浜です。そこには松が連なり茂っていたと記されています。風光明媚な場所だったことがわかります。「邑美冷水」と同様に、そこも船で出かけた場所だったのでしょう。



「邑美冷水」（目無水）から中海を望む

## 2

## 歌垣

さて、カップル限定と申し上げましたが、「前原埼」で行われた男女の集いとは何か。それは歌垣です。歌垣とは、男子のグループと女子のグループと集まって、歌を掛け合い、気のあった男女がペアーとなって、木陰などに隠れて愛を語り合うものです。合コンのようなものと言ってしまうえば、それまでですが、『万葉集』を始めとする古代歌謡の分析から、本当に相手を受け入れる決意がなければ、女子は決して男子に名前を明かしてはいけないという暗黙のルールがあったことがわかっています。

また、歌垣の場には、男女の中を取り持つような道化の役割を持つ年長者もいたようです。さらに、歌垣の場においては、身分が高い男子であっても、そのことで意中の女子を「お持ち帰り」することはできませんでした。『日本書紀』の武烈即位前紀によると、武烈天皇がまだ即位前の皇太子であった時、影媛を見初めて、大和の海石榴市という市で口説こうとしましたが、二人の間に平群臣志毘という人物が割って入り、影媛はすでに自分と通じているということを知り、皇太子に告げたと、皇太子は引き下らざるを得なかったと書かれています。ただし、その後、皇太子は志毘を殺してしまいましたが。



歌書の様子の推定復元模型  
(古代出雲歴史博物館)

## 3

## 広い範囲から人が集まる うたげの場

宴の舞台となった意宇郡の忌部神戸の「神の湯」や島根郡の「邑美冷水」と「前原埼」は、古代の行政区画で言えば、意宇郡や島根郡に属していましたが、そこには出雲各地から人々が集まってきたと考えられます。

たとえば、「神の湯」は、出雲から石見へと向かう山陰道と出雲山間部へと向かう「正南道」との分岐点にありますので、大原郡・飯石郡・仁多郡など奥出雲から人々が集まってきた可能性があります。また、「邑美冷水」や「前原埼」は「入海」をはさんで伯耆国と面していますし、晴れた日には、その彼方に「火神岳」と呼ばれた伯耆大山を見渡すことができます。おそらく、伯耆国からも人々が船に乗ってやって来たことでしょう。

このように見ていけば  
宴や歌垣の舞台となる場所  
は、異なる地域の人々が  
接触する交流の場となる  
わけであり、それは異なる  
地域間の婚姻なども行われ  
るきっかけになったかもし  
れません。



大海崎集落から中海・大山を望む

## 風土記の景観

古代出雲と言えば、出雲大社や荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡など大量の青銅器が出土した遺跡が全国的に知られ、独自の文化を有していたことにスポットが当たります。しかし、それと共に重要なことは、『出雲国風土記』に記された宴や歌垣の舞台が今でも残されており、現地へ行くと、『出雲国風土記』の記述を彷彿とさせるような景観が今も残されていることです。このような「風土記景観」はいつまでも大切に残したいものです。『出雲国風土記』の現場に立つ時、古代出雲人の息づかいが聞こえてくるように思えるのは、私だけでしょうか。



## ヒストリー作成体制

- 事務局：松江市文化スポーツ部松江城・史料調査課、文化財課
- 本文執筆：森田喜久男
- 編集：文化スポーツ部、丹羽野裕が松江市文化財保存活用計画協議会および事務局内で協議をして編集した。

---

## 松江のヒストリー集 5

### 『出雲国風土記』と松江のヒストリー【エッセイ集】

#### エッセイ3 『出雲国風土記』にみる古代人のレジャーと観光

令和8年(2026)3月30日

松江市文化スポーツ部 松江城・史料調査課



